

千葉の園芸

発行所 千葉市中央区市場町 1 - 1
公益社団法人千葉県園芸協会
連絡先 043 (223) 3005
発行日 毎月 1 日
平成 30 年 7 月号

頑張る産地



後継者組織が主体となった産地の維持発展を目指して ～ J A 千葉みらい佐倉大和芋部会総合企画部の取組～

印旛農業事務所 改良普及課
上席普及指導員 早崎 知子

J A 千葉みらい佐倉大和芋部会の後継者組織「総合企画部（13 名）」では、新技術の実証、栽培試験、研修会、省力化機械導入等により、技術向上と経営改善を目指し活動しています。若手生産者が規模拡大することで、産地の維持発展の牽引役となることが期待されています。

1 背景

佐倉市は昭和 30 年代から続く大和芋の産地であり、J A 千葉みらい佐倉大和芋部会（平成 30 年度 37 戸）による市場出荷が行われています。

平成 5 年度には集出荷センターが整備され、生産者による選別や調製作業が省力化されました。

若手生産者のいる経営体等は、規模拡大を図っていますが、洗浄や収穫作業の労力負担が大きく、規模拡大の阻害要因になっています。

栽培に使用する種芋は、自家増殖の他、一部を他産地から購入していますが、種芋生産地の高齢化から、今後の安定的な確保が懸念されています。

平成 25 年度に、若手生産者が技術向上に取り組むため、部会内に総合企画部が設立されました。この組織が中心となり、技術改善や規模拡大を進めることで、産地の維持発展が期待されています。

2 主な活動と成果

① 種芋大量増殖技術の実証

大和芋の優良種芋を安定的に確保するため、2 年間、種芋増殖技術の実証に取り組みました。

チェーンポット苗の作成から収穫までの一連の作業を、総合企画部の部会活動として実践し、技術を習得しました。現地検討会では、大和芋部会に参加を呼びかけ、情報の共有化を図りました。これらの結果、技術の現地導入の可能性が確認できました。



大和芋の苗生産の共同作業



合同視察研修会での情報交換

② 合同視察研修会

平成 30 年 2 月 22 日、印旛・香取農業事務所共催の合同視察研修会に参加し、産地間交流をしました。

種芋の調製・貯蔵技術を学ぶため、(公社)千葉県園芸協会種苗センターの視察と、農林総合研究センターや生産者間で、情報交換を行いました。

また、農機のメーカーを視察し、省力化機械の最新情報や、生産工程管理の方法を学び、今後の経営改善に向けて検討しました。

③ 輪作や土壌物理性改善の取組

大和芋の連作は、土壌病害虫等の被害を拡大し、品質・収量の低下要因になります。また、ほ場の硬度は、根部障害発生との相関があります。

平成 28～29 年度、2 名が農林総合研究センターと連携し、輪作による被害軽減効果を検証しました。平成 29 年度は、4 名がほ場の硬度調査を行い、土壌管理方法（深耕、ほ場選定等）を見直しました。

④ 省力化機械の改良・開発への取組と導入

洗浄機や収穫機メーカーに、改良・開発を促すため、改善点の提案や情報交換会を行ってきました。

洗浄機については、平成 26 年度から、作業効率の高いブラシ式洗浄機の導入が始まり、導入農家では、出荷量の拡大が図られています。

収穫機については、メーカーとの情報交換会を開催し、要望を伝え、改良・開発に前向きな回答を得られています。

省力化機械導入により、26～29 年度の間で延べ 11 戸（うち総合企画部 8 戸）が規模拡大しました。

3 今後の取組

総合企画部では、種芋増殖技術については、今後は一部作業の外部委託を検討しつつ、現地普及を進めます。また、栽培技術や経営改善、産地の知名度向上につながる取組、さらに新たな担い手の確保育成等にも、活動の幅を広げる予定です。

花植木ニュース



県産花植木を活用した伝統文化の展示

生産振興課園芸振興室
(千葉県花き振興地域協議会)

千葉県花き振興地域協議会では、本県特産の植木を活用した千葉県植木伝統樹芸士による実演会の開催や県産花きを活用した日本の伝統文化である「生け花」の展示を行い、花きに関する伝統文化を紹介しました。

1 はじめに

千葉県花き振興地域協議会は、花植木の生産・供給体制の強化、及び需要の拡大を通じて、生産振興などに資することを目的に、県、生産者団体、流通・小売業者、華道団体を構成員として平成26年に設立された団体です。今回は、平成29年度に国産花きイノベーション推進事業を活用して実施した植木伝統樹芸実演会及び生け花の展示を御紹介します。

2 植木伝統樹芸技術実演会の開催

植木の伝統樹芸技術とは、本県の篤農家が生み出したノミを使って自由に枝を曲げる‘割り(くじき)’に代表される植木の造形技術の総称をいいます。これらの技術を有している生産者を県では、「千葉県植木伝統樹芸士」として認定しています。(平成29年度末までに59名認定) この伝統的な樹芸技術を多くの方に御覧いただき、県産の植木を千葉県内だけでなく、より広くPRするために初めて日比谷公園で実演会を開催しました。

実施日 : 平成29年12月3日

実施団体 : 千葉県植木生産組合連合会
(匝瑳市植木組合)



植木伝統樹芸士によるせん定の様子

1本の木が匝瑳市植木組合の6人の植木伝統樹芸士により整えられ、大きな枝を曲げた時は、観客の皆様から大きな拍手が沸いていました。

観客の方からは、「千葉県出身だけど、千葉県が植木生産が盛んでこんなに素晴らしい技術があるなんて知らなかった。」などの声に加え、外国人の方も多数見られ、パネルを熱心に読んでいました。日本の植木文化が海外でも人気となっていることが伺えました。

3 生け花の展示

日本の伝統文化である年中行事を花で迎える「花飾り」の習慣など、花きに関する伝統と文化(文化史、江戸時代の生け花、多様化する生け花等)を広く伝えるために県産の花きを活用した生け花の展示を行いました。



華やかなディスプレイの様子

実施日 : 平成30年1月5日～8日

実施団体 : 千葉県茶華道協会

実施場所 : そごう千葉店

(6階千葉県フラワーフェスティバル会場内)

会場を訪れたお客様は、熱心に展示パネルを見て、ディスプレイの前で写真を撮っていました。

野菜ニュース



初夏ねぎの産地連携の取組について

公益社団法人千葉県園芸協会
産地振興部 主査 金森 啓介

(公社)千葉県園芸協会では、県や全農千葉県本部、関係JA等をメンバーとしてねぎ協議会を設置し、産地間連携によるオール千葉体制で生産力・販売力両面の強化に向け活動しています。今回は、主に初夏ねぎにおける取組について紹介します。

1 生産の状況について

平成27年度に、九十九里地域の3JA（長生、山武郡市、ちばみどり）が合同で、4～5月の端境期に出荷するねぎを「プレミアム夏ねぎ」として生産・販売する取組から、初夏ねぎの産地連携がスタートしました。この時期の栽培は、トンネル資材のコストやその設置に係る作業時間の増大、水稻栽培との労力競合などといった課題があったものの、助成金や技術向上支援等の取組を通じて経営上の優位性が理解され、年々生産が拡大しています。出荷量は、平成28年産が約44,000ケース、平成29年産が約55,000ケースと増加し、平成30年産も前年産比で増加の見込みとなっています。

2 販売の状況について

「プレミアム夏ねぎ」は、やわらかさや鮮度が特徴であり、市場からも高い評価を受けることができました。そのため、商品としての認知度を高めることが有利販売につながると考え、産地共通のシールやスイングポップなどでのPRを積極的に行ってきました。

また、平成29年度からは、大田市場で産地合同PRを実施し、実需者に対する認知度向上にも努めているところです。

そのほかにも、市場や産地、関係機関等を集めた販売会議を毎年実施しており、生産側・販売側双方の情報共有を図っています。

3 新たな動きについて

オール千葉として取組を進めてきた中で、上記以外のJAの関心も高まり、更なる取組の拡大が見込まれています。実需者からも増産を求められていることから、新たな産地の育成に向け、他地域でも栽培実証試験を始めています。

今後、産地が拡大しても品質を保っていくためには、適切な栽培管理や出荷調製作業の励行と併せて、出荷規格の統一が不可欠です。「プレミアム夏ねぎ」は、いずれの産地も夏ねぎの規格を準用していることから、本取組を契機に、夏ねぎ全体の規格統一に向けた検討を始めています。

本県のねぎは、ほぼ周年で生産されている主要品目であり、平成28年の産出額で222億円、全国1位となっています。初夏ねぎにおける産地連携の動きを、秋冬ねぎ等の他の作型へも波及させていくことで、千葉県産ねぎ全体の産地振興を図っていきたいと考えています。



「プレミアム夏ねぎ」



PR用の共通シール



PR用スイングポップ



市場内販促の様子

野菜ニュース



食用ナバナの根こぶ病の防除対策 ～防除効果を知って手段を選択～

千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所
生産環境研究室 主任上席研究員 久保 周子

食用ナバナの根こぶ病の発生ほ場では、土壌 pH を高くし、発病しにくい環境を整えます。激発ほ場では、これに加え薬剤を処理することにより、高い防除効果が期待できます。自身のほ場の発病程度を把握し、防除法を選択することが根こぶ病の防除には重要です。

1 はじめに

食用ナバナは軽量で高齢者にも取り組みやすい品目として、県内の主産地である南房総地域では重要な品目として位置付けられています。しかし、ナバナ根こぶ病による被害が生産阻害要因となっており、その対策が求められています。そこで、防除手段を選択する際の指標とするため、各防除対策の効果を評価したので紹介します。

2 アブラナ科作物に発生する根こぶ病とは

食用ナバナに発生する根こぶ病は、多くのアブラナ科作物の根こぶ病と同様に、病原菌 *Plasmodiophora brassicae* によって引き起こされる病害です。根こぶ病は、根にこぶを生じ、養水分の吸収が十分でなくなるため、地上部の生育が不良となる病害です(写真)。根こぶ病菌は休眠胞子の形で土壌中に数年間生存します。アブラナ科作物が栽培されるとその休眠胞子が発芽して根に侵入します。根こぶ病菌の増殖に伴い根の細胞が増大し、こぶを形成します。その後こぶは腐敗し、内部に形成された休眠胞子が土壌中へ拡散し、新たな感染を繰り返します。

3 登録薬剤の防除効果

根こぶ病の登録薬剤であるネビジン粉剤及びオラクル粉剤処理は非常に有効な防除手段です。前年中発生ほ場に薬剤を処理しなかった場合には、播種 30 日後の発病株率は 42.9% でしたが、ネビジン粉剤及びオラクル粉剤を 30kg/10a 処理した場合には、播種 30 日後の発病株率は多発ほ場ではいずれの薬剤も 0%、激発ほ場でもそれぞれ 0% 及び 1.3% と高い防除効果が確認されました。

4 土壌 pH 矯正資材の発病抑制効果

土壌 pH を 7.0 以上に高くすると、高い発病抑制効果が期待できます。根こぶ病菌を高密度に調整し

たほ場に、転炉スラグ(ミネカル、産業振興(株)) 750kg/10a 又は 1,500kg/10a を土壌全面に混和した試験では、pH6.63 であった無処理区の発病株率が 55% であったのに対し、pH7.66 及び 8.15 となった処理区の発病株率は、15% 及び 0% でした。

5 その他耕種的防除法の発病抑制効果

根こぶ病は 18℃ 以上で発病するとされるため、播種時期を遅らせることも有効です。平均地温が 18℃ を下回る 10 月下旬に播種することで、播種 30 日後の発病株率を 0% に抑えることができましたが、収量が少なくなるため、遅い時期の播種に適した品種を選択する必要があります。また、おとり作物や移植栽培は単独での効果は低いものの、薬剤と組み合わせることにより効果が期待できます。

6 防除効果から考える対処法とは

根こぶ病は、土壌 pH の高い環境下では発病が抑制されます。したがって、常に pH を 7.0 以上に保ち、発病しにくい環境を整えることが望ましいです。その上で、発病が認められた場合には、薬剤による防除が大前提となります。自身のほ場がどの程度汚染されているかを前年までの発病から把握し、各ほ場の状況に応じて有効な防除法を選択し、適切な手段を講じていくことが、ナバナ生産を続けていくためには重要です。



写真 根こぶ病が発生した食用ナバナの根部
(左：発病株、右：健全株)

千葉県でのミナミアオカメムシの発生と分布

千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 生産環境研究室
(執筆者: (現)同センター 病理昆虫研究室 研究員 清水 健)

野菜や水稻を加害する南方性農業害虫ミナミアオカメムシは、西日本から東日本へと分布域を拡大させています。千葉県でも平成21年に県南部で初めて発生が確認されて以降、県北部へ分布を拡大させており、イネ、枝豆、オクラ、トマトなどの品目で注意が必要となっています。

1 はじめに

ミナミアオカメムシ(以下ミナミアオ)は、アブラナ科、イネ科、ウリ科、ナス科、マメ科作物など、多品目を吸汁加害する害虫です。本種は南方性の昆虫で西日本を中心に分布しており、以前は千葉県には生息していませんでした。しかし、昨今の暖冬化の影響か、平成21年に初めて千葉県でも発生が確認され、その後、県南部において本種が定着していることが確認されました。

2 県内での分布拡大

千葉県においてミナミアオの分布は拡大傾向にあります。オクラを対象作物として9~10月に県内各地での発生を調査したところ、平成26年は市原市が発生の北限でしたが、平成28年には印西市や成田市にまで発生地域を広げていることが分かりました。夏から秋にかけては、ほぼ県内全域でミナミアオが発生する可能性があります。

3 近縁種アオクサカメムシ

ミナミアオと同時に近縁種のアオクサカメムシ(以下アオクサ)が発生している場合もありますが、判別方法は写真のとおり、成虫の翅をめくって背面が緑色なのがミナミアオ、黒色がアオクサです。

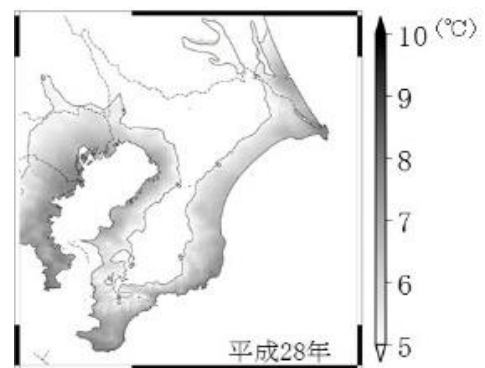
以前から温帯に生息していたアオクサは、同じ地域にミナミアオが侵入すると種間競争によって駆逐されてしまうことが知られています。千葉県で最も早くからミナミアオが定着していた房総半島南端付近では、現在アオクサの発生は見られなくなっています。

ミナミアオはアオクサに比べて増殖能力が高く、多くの都府県で問題害虫となっています。より注意が必要な害虫です。

4 今後の発生について

ミナミアオは最寒月(1月)の平均気温が5℃を下回る場所では越冬が難しいことが知られています。冬季の気温が比較的低くなる県内の内陸部では越冬の可能性は低いですが、沿岸部には温暖な地域が多いため、このような地域では越冬が可能です。越冬したミナミアオがその後に増殖し、成虫が移動分散することによって、県内各地での今後の発生量がますます増加することが懸念されています。

イネ、ダイズ、各種野菜類には「ミナミアオカメムシ」や「カメムシ類」に使用できる殺虫剤が複数あります。もしミナミアオの発生が見られた場合には、これらを利用して適切に防除を行ってください。



1月の平均気温分布(着色部が5℃以上)



オクラに寄生するミナミアオカメムシ



ミナミアオカメムシ アオクサカメムシ

びわ共進会及び消費者拡大キャンペーンの開催について

生産振興課園芸振興室

6月7日南房総市において第13回千葉県びわ共進会を開催しました。

生産者が丹精込めて作ったびわ109点の中から厳正な品質審査を行い、特別賞15点、奨励賞21点を決定しました。9日(土)～10日(日)には、イオンマリンプシア店及びしょいか～ご習志野店において特別賞の展示・販売を行いました。受賞作品を見た方々からは、「こんなにきれいなびわを見たことがない。是非、購入したい。」という驚きと称賛の声が聞かれました。

上位3賞について

賞名	所属組合名	氏名	品種
千葉県知事賞	八束枇杷組合	穂積 正夫	田中
千葉県農林総合研究センター長賞	館山市びわ組合連合会	庄司 ひろ美	大房
(公社)千葉県園芸協会長賞	八束枇杷組合	羽山 節子	房光



千葉県知事賞受賞作品



審査風景



販売風景

第 65 回（平成 29 年度）千葉県野菜品種審査会の開催結果

千葉県野菜品種審査会は、県内の野菜産地に適した優良品種の選定と野菜種子の素質改善を通じ、県産野菜の品質向上と野菜産地の振興を図ることを目的として、千葉県、日本種苗協会千葉県支部、公益社団法人千葉県園芸協会の共催により、昭和 27 年から開催しています。

29 年度は、未成熟とうもろこし（トンネル栽培）、こかぶ（秋どり栽培）、ほうれんそう（秋冬どり栽培）、こまつな（冬どり栽培）の 4 品目で実施しました。

延べ 37 社から総計 105 点の出品があり、農林水産大臣賞をはじめとする特別賞 5 点、金賞 8 点、銀賞 7 点を決定し、平成 30 年 5 月 28 日にプラザ菜の花（千葉市）において表彰式が開催されました。

賞名	品目	品種名	出品会社
農林水産大臣賞	こかぶ	雪牡丹	(株)武蔵野種苗園
関東農政局長賞	ほうれんそう	ドンキー	(株)サカタのタネ
千葉県知事賞	未成熟とうもろこし	味来 1 3 6 4	朝日工業(株)
千葉県議会議長賞	ほうれんそう	早生グローリー	中原採種場(株)
一般社団法人日本種苗協会長賞	こまつな	冬のエース 3 号	トキタ種苗(株)